

論文

『羽鱗の蛇』論考——「二道」の神について——

山田 晶子

要 旨

『羽鱗の蛇』(*The Plumed Serpent*)は、D.H.ロレンスの第9作目の長編小説であり、メキシコが舞台になっていて、1926年に出版された。ロレンスは、第一次世界大戦を体験した後ヨーロッパに絶望してそこを離れ、世界を回りながら遂に1922年に新世界アメリカへ到着したのであった。『羽鱗の蛇』は、ロレンスが人類の再生をインディアンの二人の革命家ドン・ラモン将軍とドン・シプリアーノ将軍の思想に託して描いており、筋は女主人公であるアイルランド人のケイトとドン・シプリアーノの結婚を中心において、ケイトが白人種のキリスト教を中心とする愛の思想を脱して、インディアンの古代の神であるケツアルコアトルという鳥と蛇の両要素を持った神の信仰に目覚めるものである。ケツアルコアトルは「矛盾」を内包しながらその両要素の均衡を目指す神であり、この思想は、ロレンスがすでに第一作から書いてきたパン神の意味を更に発展させたものである。それは宇宙の光と闇という二元に対応する男女の二元の均衡を目指す神である。ケツアルコアトル神は二元の思想を表わすものであり、その代弁者であるドン・ラモンはこの神を「二道」の神と呼んでいる。本論は、この「二道」の神の思想とは何かについて論じている。

キーワード：光、闇、火、木、水、大地、鳥、蛇、パン神、二道、太陽、血

序

最初の草稿が1923年に書かれ始めた『羽鱗の蛇』(*The Plumed Serpent*)はD.H. ロレンス (David Herbert Lawrence) の第9作目の長編小説である。このときの草稿の題名は『ケツアルコアトル』(*Quetzalcoatl*) と呼ばれており、ロレンスはこれを書き終えた後一旦この作品の執筆を断念していたが、1925年に新たに書き始めて、1926年に出版された。このとき題名が『ケツアルコアトル』から『羽鱗の蛇』へと改められた。

この小説は、メキシコが舞台になっていて、作品の主題には、ロレンスが新大陸へ旅をしてアメリカ合衆国のニュー・メキシコ州及びメキシコのオアハカに滞在中に体験したインディアンとの関わりが色濃く反映している。

ロレンスは、1916年に出版された『イタリアの薄明』(*Twilight in Italy*) においてすでにアメリカに言及したエッセイを書いている。そのうちの「サン・ガウデンチオ」(‘San Gaudenzio’) においては、イタリア人の農夫であるパオロが貧しいイタリアの生活を脱するためにアメリカの金鉱を目指すという話があり、アメリカが金儲けの場所であることが書かれているし (TI 158-9), また「ジョン」(‘John’) というエッセイでは、ジョンという若者が、またも金儲けのためにアメリカへ出かけイタリアへ戻ってきたが、彼の服装や趣味がアメリカ好みの粗野なものであるという表現があり (TI 182-3), この時点では、アメリカはロレンスにとっては軽薄な場所であった、という印象を受ける。しかし、イギリスで第一次大戦時を過ごしたロレンスは、その時の辛酸を極めた体験に嫌気が差して、イギリスを脱した後は、最終的にアメリカを目指すことになる。このことは『アルヴァイナの墮落』(*The Lost Girl*) の結末でも、チッチョがアルヴァイナに、戦争から帰ってきたら一緒にアメリカへ行こうと呼びかけている箇所からも分かるし (LG 339), 『カンガルー』(*Kangaroo*) でもロレンスの分身と考えられるサマーズ (Somers) はオーストラリアを去ってアメリカを目指す (K 353)。そしてロレンスが始めてアメリカの地を踏んだのは、1922年9月のことであり、サン・フランシスコに到着したのであった。

ロレンスの作品におけるインディアンの影響は、第6作目の長編小説である1920年出版の『アルヴァイナの墮落』に早くも表われている。この長編小説では、主人公アルヴァイナ (Alvina) が再生する過程において、インディアンの血を引いている旅回りの一座ナッチャ・キイ・タワラ座の女座長マダム・キシユイーガン (Madam Kishwegan) とその一座の一員である若者チッチョ (Ciccio) のアルヴァイナへの影響力が大きく関わっている。アルヴァイナは、チッチョと結婚することによって女として開花し、再生するのである。また、ロレンスは、アメリカ大陸へ渡ってから、詩やエッセイでインディアンについて書いている。彼の思想的な発展において、インディアンの存在は欠かせなかったのである。¹⁾

では、ロレンスがインディアンから受けた影響とはどのようなものであったのか？ 彼は、ニュー・メキシコ滞在後メキシコへ渡ったが、そこでもインディアンとその文明に影響を受けた。新大陸のインディアンは、白人が侵略する以前にアステカ文明 (Aztec Civilization)²⁾ を作り上げており、白人によってその文明は滅ぼされたが、その文明は遺跡や文書に残されている。ロレンスがアステカ文明の遺跡から受けた印象は相反するものであった。しかしティオテワカン (Teotihuacan) の遺跡には感銘を受けた。ティオテワカンの遺跡にはケツアルコアトルという神像が残されている。ロレンスはそれを見た印象を「さようなら、アメリカ」 ('Au Revoir, U.S.A') というエッセイの中で述べている。

It's a queer continent. The anthropologist may make what prettiness they like out of myths. But come here, and you'll see that the gods bit. There is none of the phallic pre-occupation of the old Mediterranean. Here they hadn't got even as far as hot-blooded sex. Fangs, and cold serpent folds, and bird-snakes with fierce cold blood and claws. (*Phoenix* 105-6)

このエッセイの引用から、ロレンスは「アメリカでは神が骨抜きにされているが、メキシコではまだ骨が抜かれていない強い神が存在している」と感じており、荒々しい神であるケツアルコアトルに惹かれていることが分かる。

古代のメキシコ・インディアンは、ケツアルコアトルという神を信仰していた。この神の外観的な特徴は、大蛇が羽毛を生やしている姿で表わされている。蛇は大地の中に生きている存在であり、一方、羽毛は鳥を意味しているので、空に生きる存在であるため、両者を併せ持つケツアルコアトルは、空と大地を兼ね備えた意味を持っているのである。つまり、ケツアルコアトルは、空が意味する精神性と大地が意味する肉体性の均衡を目指す神なのである。キリスト教が目指す「空」だけの一道の神とは異なり、ケツアルコアトル信仰は「空」と「大地」の二道を目指す神なのである。

さて、ウィリアム・ヨーク・ティンダルの研究によると、ロレンスは彼の文学的ケツアルコアトルの素材を、メキシコシティで知り合った考古学者である故ゼリア・ナットール (Mrs Zelia Nuttall) の著作から得たものである。ロレンス夫人のフリーダによると、ロレンスはナットールの著作『旧世界と新世界の文明の基本的原理』 (*Fundamental Principles of Old and New World Civilizations*, 1901) を読んでおり、この著書からケツアルコアトルという神の特徴を知った。しかし、ナットールの著作にはウィチロポチトリとテツカトリポカという双子の神が書かれているが、ロレンスは後者を省略して、自分流のケツアルコアトル神を書いたということである (*Critical Assessment Vol. II*: 5)。ロレンスは、ウィチロポチトリを大地と火と下世界の神として登場させ、ケツアルコアトルを風と雨と上方

世界の神でありかつ雨と大地を結合させる至高の神として登場させており、ケツアルコアトル神に関しては、ナットールの考えをそのまま使用している、とティンダルは述べている (CA: 5)。しかし『羽鱗の蛇』を読むと、ドン・シプリアーノがウィチロポチトリ神の化身となっていることが分かる。また、ケツアルコアトル神は、上方世界の神であることよりも下世界の神であることが強調されている。草稿である『ケツアルコアトル』と決定稿である『羽鱗の蛇』は、非常に異なった作品になっていると言われている。

旧大陸において、キリスト教の「愛」という思想の偽善性に心底嫌気が差していて新大陸まで道を求めて放浪してきたロレンスには、ケツアルコアトル信仰の二道の思想は理に叶うものであった。彼はすでに第2作目の長編小説である『不倫』(*The Trespasser*)において、精神的な女性である妻ビアトリス (Beatrice) と恋人ヘレナ (Helena) に絶望して自殺する主人公シーグマンド (Shiegmund) を描き、彼の心臓の鼓動を地球の鼓動と重ね合わせている。恋人のヘレナは彼に「偉大な神」(a great God) を感じ取るのであるが、それは「野蛮な神」に感じられ、彼を受け入れられなかったのである (T 79)。この「偉大な神」という言葉は『羽鱗の蛇』にも表われている。また、第5作目の長編小説である『恋する女たち』(*Women in Love*) では、ロレンスの代弁者であるバーキン (Birkin) は、「悪魔の恋人」(Demon Lover) に言及し (WL 43)、彼自身通常の白人男性とは異質な存在であることがわかるが、『羽鱗の蛇』においても主人公ケイトの恋人となり最後には彼女と正式に結婚するインディアンの男性ドン・シプリアーノ (Don Cipriano Viedma) 将軍も悪魔を思わせる男性として「シプリアーノのような顔は、神であると同時に悪魔の顔であり、死なないパン神の顔である」(a face like Cipriano's is the face at once of a god and a devil, the undying Pan face; PS 311) と表現されている。そして、『恋する女たち』以降、ロレンスの作品のテーマとなっている「(男女の) 星の均衡」(star-equilibrium) は、『羽鱗の蛇』においては、ケツアルコアトル信仰の思想と重ねあって、中心的テーマになっていると思われる。

これまで、ロレンスの研究者たちの中には、第7作目の長編小説である『アーロンの杖』(*Aaron's Rod*)、第8作目の長編小説である『カンガルー』そして第9作目の『羽鱗の蛇』を合わせてリーダーシップの小説であると捉え、その主題には政治的な要素が入っていると論じている人たちがいる。しかし筆者は、これら第7作から第9作までの小説を「リーダーシップ小説」という政治的枠組みで捉えることは、ロレンスの小説の主題を適切に理解することから外れるのではないのかと危惧する。ロレンスのこれら3作の長編小説には、確かに政治に関わった人物が登場するが、各小説の主人公リリー (Lilley) でもアーロンでもサマーズでも直接政治には関わっていない。また、『羽鱗の蛇』では、ケツアルコアトルを信仰して、キリスト教を排斥しようとする歴史家かつ考古学者のドン・ラモン将軍 (Don

Ramon Carrasco) やドン・シプリアーノ将軍は、政治的な動きをする。しかし、決して政治体制を確立するところまでは描かれていない。飽くまでもキリスト教会を打ち壊すという点で終わっている。

本論では、『羽鱗の蛇』が表面上は政治的な描かれ方をしているながら、実は、ロレンスのキリスト教批判と、彼独自の「黒い神」という思想を描いていることを論じようと思う。つまり、『羽鱗の蛇』においては、ロレンスのキリスト教批判が最大限にまで高められているのである。そして究極的には、彼の芸術上の主題は、「男女」に代表される二元の均衡であり、この主題が「二道」の神であるケツアルコアトル信仰に重ねあわされていることを論じようと思う。

I 白い外国人と黒い原住民

『羽鱗の蛇』の主人公は、ケイトという名前のアイルランド人女性である。彼女がアイルランド人であるということは、キリスト教がヨーロッパを支配する以前に生きていて異教の神々を信仰していたケルト人 (Celts) の血を引いている人間であるという暗示が含まれている。彼女はアイルランド人で、反イギリス政府の闘志として戦った2番目の夫ジョアキム (Joachim) が死亡した後未亡人として生きてきたが、あと一週間で四十歳の誕生日を迎える頃、メキシコにやって来た。彼女は今の自分を振り返り今後の生き方について思い巡らす。ケイトの夫のジョアキムは、イギリスのアイルランド支配に抵抗して戦った闘志であり、アイルランドの英雄であったが、彼女は夫と自分の間には真の繋がりが欠けていたと感じている。それは、女として自分が真に生きてはこなかったという不満になって彼女の心の底に横たわっている。このように前半生が必ずしも幸福と言えた訳ではなかったが、彼女は夫が知識階級の有名人であったし、彼女も教養の高い裕福な未亡人なので、今は自由に生きられる境遇なのだ。しかし、メキシコへ来て直後には、彼女の心は空虚なままで満たされてはいない。そして彼女が、これからメキシコで体験する様々な出来事、特に黒いインディアン人の社会改革者であるドン・ラモン将軍とドン・シプリアーノ将軍という二人の男性との関わりが、彼女の人生を大転換させることとなる。

まず、初めてケイトがドン・シプリアーノに出会った場面を考察してみよう。そこは、メキシコの闘牛場であった。彼女は、白人であるオーエン (Owen) とヴィリヤズ (Villiers) という友人たちと共に、闘牛を見物する。闘牛というのは、もともと神聖な宗教上の儀式であったのだが³⁾、今は、俗悪で野蛮な動物虐めに堕してしまっているというのがケイトの感想であった。特に、ケイトが見物した闘牛では、牛が馬に角を突き立てて殺すという事件が発生した醜悪な場面を呈し、ケイトはこの場面にむかつき、耐えられなくなって一

人だけ先にホテルへ戻ろうとする。そこで、タクシーを拾って助けてくれたのが、ドン・シプリアーノであった。

二人が出会ったとき、雨が土砂降りに降っていた。この雨は、ケイトの心の苦しみを癒す浄化の働きをしているものとして描かれているだろう。そしてそのとき登場したドン・シプリアーノは雨の化身であるかのようであり、ケイトの運命に影響を与えるのではないのかという暗示がある。後の章、つまり第12章の「最初の水」(The First Waters)と第13章の「最初の雨」(The First Rain)でも、水と雨は重要な象徴となっている。それは、ケツァルコアトルという神を信仰する宗教が実現する上での前触れであり、古いキリスト教社会を浄化する意味を持っていると思われる。雨は天と地を結び付けるものであり、ケツァルコアトルが内包する「鳥」と「蛇」という矛盾を調和させる要素である。ドン・シプリアーノはケイトよりも小柄であるが、そして色が黒いインディアンであるが、オックスフォード大学で教育を受けたことがあり、教養があり威厳があり、かつ優しさと温かさを感じさせる男性であった。ロレンスは、インディアンに対して見下すような偏見を持っておらず、尊敬を抱いていた。それがケイトという主人公の思いに反映されている。

She thought of the little tale the natives tell.---When the Lord was making the first men, he made them of clay and put them into the oven to bake. They came out black. They're baked too much! said the Lord. So he made another batch, and put them in. They came out white. They're baked too little! he said. So he had a third try. These came out a good warm brown. They're just right! said the Lord. That couple from the Middle-west, that withered baby-faced and that limping Judge, they weren't baked. They were hardly baked at all. (PS 47)

ロレンスは、インディアンの存在を全て肯定したり白人を全て否定的に捉えているのではない。ケイトは白人であり、再生を期待されている女性であるが、彼女はドン・シプリアーノと結婚するまでに、激しく深い葛藤に悩むのである。先ず最初に、メキシコという国は、来た当初から彼女に失望を与えた。闘牛場でもそうであったが、他の場所でもそうなのであった。上の引用に出ている「焼かれていない」白人や「焼かれすぎた」インディアンの血を引く人たちがばかりであったのである。ドン・ラモンとドン・シプリアーノだけは例外的に理想的な男性として登場している。「焼かれていない」白人というのは、ロレンスがこれまで他の作品中でも批判してきた精神主義的なキリスト教徒たちである。一方、「焼かれすぎた」インディアンたちは、深みがない野獣のようなところがある墮落した人間たちである。ケイトは、メキシコでも、このようなどちらかに偏りすぎた人間たちを目にして失望するのである。

Superficially, Mexico might be all right: with its suburbs of villas, its central fine streets, its thousands of motar-cars, its tennis and its bridge-parties. The sun shone brilliantly every day, and big bright flowers stood out from the trees. It was a holiday. Until you were alone with it. And then the undertone was like the low, angry, snarling purring of some jaguar spotted with night. There was a ponderous, down-pressing weight upon the spirit: the great folds of the dragon of the Aztecs, the dragon of the Toltecs winding around one and weighing down the soul. And on the bright sunshine was a dark steam of angry, impotent blood, and the flowers seemed to have their roots in spilt blood. The spirit of place was cruel, down-dragging, destructive. (PS 49-50)

上の引用に見られる「太陽」と「血」と「竜」と「暗黒」と「下方向」は、この小説のキーワードになっている。これらの言葉は否定的な意味をケイトや読者に与える。また、これらの言葉の特徴は、反キリスト教的である。それらにはキリスト教的な精神性が含まれていないと感ぜられる。しかし彼女は、メキシコ人たちの短所よりも長所に一層引かれてゆくようになる。それは、彼女がシプリアーノと結ばれる伏線として書かれていると思われる。第3章の「四十歳の誕生日」(Fortieth Birthday) という章では、彼女は新聞の見出しに「古えの神々のメキシコ帰還」を見つけ、その記事を読むのであるが、この記事こそが、この小説の主題であるケツアルコアトルについて書かれたものであり、ケイトと古代の宗教を結び付けていくことになる。

She wanted to go to Sayura. She wanted to see the big lake where the gods had once lived, and whence they were due to emerge. Amid all the bitterness that Mexico produced in her spirit, there was still a strange beam of wonder and mystery, almost like a hope. A strange darkly-iridescent beam of wonder of magic. (PS 58)

ケイトの再生の予兆が、この「驚異と神秘の不思議な光線」(a strange beam of wonder and mystery) という言葉に込められている。それは「虹色」であるが、キリスト教の「虹」でなくて「古代の神々」という異教と結びついた虹である。

II ドン・ラモンとドニヤ・カルロータ

ケイトの目に映るメキシコの風景とメキシコ人は、絶望的な状況にあるようでありながら、最後には希望を抱かせる不思議な存在である。「不思議な」(strange) という形容詞は、ロレンスの作品には頻りに登場するが、全体的に肯定的な意味を備えていると思われる。つ

まり、「不思議さ」があるものには再生の可能性が認められると考えられるのである。

The country gave her a strange feeling of hopelessness and of dauntlessness. Unbroken, eternally resistant, it was a people that lived without hope, and without care. Gay even, and laughing with indifferent carelessness. They were something like her own Irish, but gone to a much greater length. And also, they did what the self-conscious and pretentious Irish rarely do, they touched her bowels with a strange fire of compassion. At the same time, she feared them. They would pull her down, pull her down to the dark depths of nothingness. (PS 76)

上の引用に見られる、ケイトが共感を覚えるメキシコ人たちは、アイルランド的なものを持っていると感じられるのであり、それはキリスト教以前の異教的な要素と言える。「不思議な共鳴の火」(a strange fire of compassion) という火の喩えが異教的な要素を感じさせる。そしてメキシコは太陽の国なのであり、ケツアルコアトル信仰も太陽崇拜と関わっている。ロレンスの作品に登場する異教的太陽崇拜の主題は、短編『太陽』(*The Sun*)にも見られる。この短編小説では、大都会ニューヨークに生きていて神経を衰弱させたジュリエットという妻が、イタリアへ療養にやってきて、そこで農夫に遭遇し、彼のうちに古代の異教的太陽の力を見て生命力を回復させるという物語である。このように、ロレンスの作品では、異教的太陽の存在は重要である。ケイトは、白人たちとメキシコ人たちを比較しながら、どちらも生きていないのか、それともメキシコ人たちには再生の望みがあるのかと迷い続けるのであるが、白人たちが完全に生きながら死んでいることは確信しており、「白人たちは以前は魂を持っていたが、それをなくしてしまった。火の旋回軸は彼らの内部では消されてしまった。そして彼らの生命は太陽の回転とは逆方向に回り始めたのだった。」(White men had had a soul, and lost it. The pivot of fire had been quenched in them, and their lives had started to spin in the reversed direction, widdershins.; PS 78) と思う。そしてケイトの迷いのなかで、メキシコの荒廃した風景の中に聳え立つのは「原住民たちのあばら屋や藁葺き屋根の小屋」(the huts and straw hovels of the natives; PS 79) の間の豪華なキリスト教会であり、それは「幽霊のように追放されるのを待っている」(waiting like ghosts to be dismissed; PS 79) と思われる。実際のところ、この後では、ドン・ラモンが信仰するケツアルコアトル宗教の信奉者たちは、キリスト教会を破壊し、司祭を追放するのである。ケイトを代弁者として、またドン・ラモンやドン・シプリアーノを代弁者として、ロレンスは次のように自分の思いをケイトに言わせている。

The ponderous pyramids of San Juan Teotihuacan, the House of Quetzalcoatl wreathed with the Snake of all snakes, his huge fangs white and pure today as in

the lost centuries when his makers were alive. He has not died. He is not so dead as the Spanish churches, this all-enwreathing dragon of the horror of Mexico. (PS 79)

ロレンスは、ケツアルコアトル信仰を、全体的に「暗黒」と重ねている。それはこの神が白人の精神的・論理的思想に対抗する神であり、性愛の神であるからである。このことは、『カンガルー』においても述べられている (*Kangaroo*: 134-5)。しかし、上の引用で「白くて清浄な」と描写するのは、ロレンスの作品においては「白色」が肯定的な意味を持つ場合と否定的な意味を持つ場合とがあるためである。このことは「黒色」についても同様である。ラモンが信仰するケツアルコアトルは生け贄を要求する野蛮な神ではない。それは優しい神なのである。スペイン人コルテスがメキシコを征服した後、ケツアルコアトルは野蛮な神として利用されたことがあった。しかし、アステカ文明より更に遡る大昔は優しい神であった、とロレンスは書いている。ケイトには、メキシコは人間を下へ引きずり込む感じがする。そしてケツアルコアトル信仰は、二道 (the two ways) の神なので、空へと同様に大地の下へと人間を導こうとする。ドン・ラモンは、人間は「生命の木」なので、大地に引きずり込まれて根を張ることが必要であり、そうすれば大空に向かって樹液や葉を送り出すことが出来ると説く。白人たちはメキシコの森林を切り倒したが、木々の根は深く生きていてまたスペイン人たちの建築物を消し去るであろうと言う。

ドン・ラモンがメキシコ人に必要であると述べる言葉は、彼が後に唱えるケツアルコアトル賛歌である。彼の言葉はケイトに運命に似た響きを感じさせるのであるが、彼女は完全に感化されるには、この時点では、まだ迷いがある。そしてキリスト教では「初めに言葉ありき」という聖書の教えがあるが (*The Holy Bible* 1063)、ケツアルコアトル信仰では、初めに「存在」があり、言葉は後から出るものなのであり、キリスト教の思想とは逆であると言える。そしてドン・ラモンを代弁者としてロレンスは『羽鱗の蛇』においてこの逆転の思想を語りたいのである。

しかしドン・ラモンの妻であるドニヤ・カルロータは、夫の宗教を理解できない。彼女は、彼が新宗教を起そうとするのを阻止しようとしている。ケイトは、女として、カルロータを理解できる気もするが、カルロータは再生できない女性として死んでしまうことになる。それは女として男を愛せなかったことが原因である。「神は愛である」 (God is love; PS 167) と言うカルロータの「愛」は、慈善的な愛であり、男が本当に求めた愛ではなかったのである、と書かれている。ドン・ラモンは、自分が信仰する神は「男にしてくれる神」とケイトに述べたが、キリスト教ではそれが不可能なのだと言いたいのであろう。「キリスト教は精神の宗教です。そして何らかの効果を与えるためには理解されなければなり

ません。インディアンたちはそれを理解できないのです。小山のウサギと同じなのです。」(Christianity is a religion of the spirit, and must need be understood if it is to have any effect. The Indians cannot understand it, any more than rabbits of the hills.; *PS* 263) と、ドン・ラモンは司教に語っている。彼は官能の宗教を求めており、また男と女が互いに辱め合ってはならないと考えているが、妻との関係においては辱める関係に墮してしまっただのである。

Quetzalcoatl is to me only the symbols of the best a man may be, in the next days. The universe is a nest of dragons, with a perfectly unfathomable life-mystery at the centre of it, If I call the mystery the Morning Star, surely it doesn't matter! A man's blood can't beat in the abstract. And man is a creature who wins his own creation inch by inch from the nest of the cosmic dragons. Or else he loses it little by little, and goes to pieces. Now we are all losing it, in the ravishing and ravished disintegration. (*PS* 273)

ケツァルコアトル信仰が男を真の「男」にしてくれる「性愛」の神であり、「血」の欲望を大切にする神であり、これこそが人間を再生する要素であるというドン・ラモンの考えから、この小説は政治小説ではなくて、男女の真の繋がりを求める、ロレンス独自の愛が主題の小説であることが分かるであろう。ドン・ラモンは、「私は、私の魂が官能的に成就されることを切望する男なのです。」(I am a man who yearns for the sensual fulfillment of my soul; *PS* 273) とも述べている。彼がキリスト教の教会を破壊するのはその具体的な表現である。飽くまでもキリスト教の愛を信仰しようとし、女の意志を押し付けようとするドニヤ・カルロータの死は、真の女を求めるドン・ラモンと彼の代弁者であるロレンスにとっては必然的なものであったと言えるであろう。「カルロータ」という名前は、白い抑圧の象徴としてメキシコでは軽蔑されている (*CA*: 12)。

またドン・ラモンを襲撃した暗殺者たちを、ケツァルコアトル信仰者たちが私刑にする場面は、キリスト教徒がこれまで「愛」の名において戦争を繰り返してきた偽善に対するロレンスの反抗と考えられるであろう。決して、一部の研究者が考えるようなナチス的な方向をロレンスが目指しているのではない⁴⁾。冒頭の闘牛場における歪んだ血なまぐさい馬や牛殺しの場面こそが、キリスト教の墮落を表わす退廃的な儀式として批判されるものであろう。ドン・ラモンとドン・シプリアーノが、ドン・ラモンを襲った暗殺者たちを私刑にする場面は、冒頭の闘牛場と対を成しているのである。

Ⅲ ドン・ラモンとテレサ

ケイトは、ドン・ラモンとドン・シプリアーノが再興しようとしているケツアルコアトルの宗教に徐々に惹かれてゆくが、それは彼ら二人の男性の魅力が大きかったからである。そしてドン・シプリアーノは彼女に求婚するが、彼女の方にはなおもためらいがあった。しかしケイトは、ケツアルコアトル信仰に必要な「女神」の存在を説かれ、かつ賛同し、宗教的な儀式上ではシプリアーノの妻となる。彼女は大地の女神マリンチ⁵⁾と呼ばれるようになり緑の色がその象徴である。ケツアルコアトル信仰では、男と女の均衡が取れた調和が何よりも重視されているのだが、前にも述べたようにこの思想は、ロレンスが『恋する女たち』でバーキンに言わせている「星の均衡」と同じであり、『羽鱗の蛇』では更にその思想が発展しているのである。

ケイトはマリンチとなったが、まだシプリアーノの普通の意味での妻とはなっていない。しかしドン・ラモンがテレサと再婚してケイトもテレサと関わるようになってから、彼女は、自身の女性としての存在が変化しつつあるのを感じるようになる。

Kate was glad to get back to her own house, and to be more or less alone. She felt a great change was being worked in her, and if it worked too violently, she would die. It was the end of something, and the beginning of something, far, far inside her: in her soul and womb. The men, Ramon and Cipriano, caused the change, and Mexico. (PS 414)

この引用では、ドン・ラモンとドン・シプリアーノの名前しか出ていないが、この引用は、第25章「テレサ」(Teresa)のすぐ次の第26章である「ケイトは妻」(Kate is a Wife)の冒頭に書かれている。ゆえにラモンの妻になったテレサの影響を見逃すことはできない。では、テレサはどのような影響をケイトに与え彼女の変化のきっかけを作ったのであろうか。テレサは、28歳であり、メキシコ土着の大地主の娘であった。彼女は小柄で豊かな黒髪と大きな黒い目が特徴で「ここは男性が性を軽蔑しながらかつ性のために生きている国であり、これは自殺に等しい。」(“It is a country where men despise sex, and live for it,” said Ramon. “Which is just suicide.” PS 396)とドン・ラモンは言っており、性をいかに真の存在たらしめるかを考えているのだが、テレサは彼によって女として蘇ったと言えよう。彼女は目立たないほとんど見えない存在であるが、ケイトは彼女の偉大さを感じ取るのである。それは「この黒い女性の隠された秘密の力」(This hidden, secretive power of the dark female!; PS 399)と表現されている。目に見えないものの重要性が強調されている。彼女はその不思議な力によってドン・ラモンを男性として蘇らせたのであり、

このことがケイトに驚異を伴った感動を与え、彼女はドン・ラモンの説くケツアルコアトル信仰へ一層傾倒することになった。

ケイトは、金髪碧眼の男たちつまり白人よりもドン・ラモンのような黒人たちの方が世界を再生するために重要であることを認識するに至っている。しかし、彼女が真にいまだケツアルコアトル信仰へ心身ともにゆだね切れないのは、男性の方へ女性が身をゆだねてしまうという危惧、自分の自由な意志を放棄するのではないのか、という危惧があるためであった。これは、白人としての、キリスト教徒としての意識である。これは均衡の欠如ではないのか、という不安であった。だが、これは自由を失うことではないことをテレサとの関わりから悟ってゆくのである。テレサには「深い情熱」(deep passion; PS 403)があり、「黒い肌の不思議な神秘的な柔らかさ」(the strange, uncanny softness of the dark skin; PS 403)があった。つまりテレサには眼に見えない部分の存在感が、論理では割り切れない存在感があったのである。これがロレンスが重視する「血と肉」の意味である。そしてラモンは「男は血の柱でありそこに声が存在する」(Man is a column of blood, with a voice in it; PS 407) と言い、テレサも「彼は男であって、血の柱です。そして私は女であって、血の谷です。」(He is a man, and a column of blood. I am a woman, and a valley of blood.; PS 412) と言い、究極的な女と男の関係が二人の間でできていることを断言する。これを知ったケイトは、今まで自分の方がテレサよりも上位にあると思いついてきたのだが、初めてテレサの方が自分よりも上位の女性であると悟るのである。

Yes, Kate was accustomed to looking on other women as inferiors. In her own line, they usually were her inferiors. But the tables were suddenly turned. Even as, in her soul, she knew Ramon to be a greater man than Cipriano, suddenly she had to question herself, whether Teresa was not a greater woman than she. Teresa! A greater woman than Kate? What a blow! Surely it was impossible! (PS 410)

この引用に見られるケイトの悟りテレサの方が自分よりも「優れた女なのか？」という言葉に彼女の重要な変化が見られる。つまり、彼女は真に古い自己を脱しようとしているのである。また、テレサの悟りである言葉「ラモンにとって私であるものが私であり、私にとって彼であるものが彼なのです。」(What I am to Ramon, I am. And What he is to me, he is.; PS 410) は、究極の男女の均衡を言い表しているといえるであろう。テレサの目に存在する炎は、彼女の結婚生活の炎を示しており、これを悟ったケイトは悔恨を覚えるのであった。テレサは「女性性の本物の秘密、そして最奥の力」(the real secret of womanhood, and the innermost power; PS 410) を確実に知っている女なのである。「朝

は愛以上のものをもたらします。それで私は朝に対して真実でありたい。」(Morning brings more than love. And I want to be true to the morning.; PS 413)⁶⁾ というテレサは、確実に人生に対して確信を持っているのである。

このように、ケツアルコアトル信仰は、究極的に男女の均衡を求めるものであり、ゆえに『羽鱗の蛇』という小説も、『恋する女たち』の主題を拡大したものであり、その主題は政治改革ではなくて、飽くまでも男女の関係のあり方を求めるものと言える。

IV ケイトとドン・シプリアーノ

前にも述べたように、ケイトが初めてドン・シプリアーノに出会ったのは、第1章の「闘牛の始まり」(Beginning of a Bull-fight)において、彼女が闘牛場の不快さに耐え切れなくなりホテルへ帰ろうとしている時であった。彼は、タクシーを探しているケイトに親切にして、タクシーを拾い彼女をホテルへ帰らせる。彼は小柄で浅黒くあごには黒いあご髭を生やしており、特にその特徴は黒い目に表われている。その目は弓形の黒い眉の下で鋭くつりあがっている。そしてメキシコではベエドマ將軍として人々に知られている。彼は生粋のインディアンであるが、若い頃イギリスのオックスフォード大学で学んだ知識階級の間人であり、英語を流暢に話すことができる。ケイトには、ドン・シプリアーノは、憂愁を帯びていて怒りを心に抱いているが、一方で自信を持っており子供のように純真な男性であると感じ取られる。この最初の出会いから、最終章の第27章「この地で」(Here!)におけるまで最後までケイトが関わっているのがこのドン・シプリアーノという男性である。ケイトが彼から受けた印象は、悪いものではなかった。しかし二人の男女の関係は滑らかに進展するわけではなく、ドン・シプリアーノの方はケイトに対して思慕の情を直ぐに見せるのであったが、彼女の方では、まだ漠然とした感情しか抱いていなかった。というのもインディアンである彼の存在は、白人である彼女の存在と対立するものであったからである。

She looked with her troubled grey eyes into the black, slanting, watchful, calculating eyes of the small man opposite her. He had a pained expression, puzzled, like a child. And at the same time something obstinate and mature, a demonish maturity, opposing her in an animal way. (PS 40)

上の引用に見られるドン・シプリアーノの悪魔性とけだもの性こそ、ドン・ラモンと一緒にケツアルコアトル信仰を蘇らせる運動を進める彼の特徴なのであり、ケツアルコアトルの特徴をも言い表しているのである。「シプリアーノ」という名前は、イトスギの木

(cypress) と関連していると思われる。というのは、後にドン・シブリアーノは、ロレンスがたびたび作品で信奉する神として表現するパン神と関係付けられているからである。彼は「背が低くて色が黒くて、そして僅かな黒い髭を蓄えていた。」(He was short, dark, and had a little black beard; PS 21) と書かれ、ここであご髭はパン神がヤギの上半身をしていることと関連付けられている。パン神はあご髭を持つヤギ顔なのである。またイトスギは、ロレンスの作品では、パン神が崇拝されていた太古の昔と関連付けられて描かれることが多いからである。第2章の「トラコルラのティーパーティ」では、次のようにイトスギが登場している。

Dead, massive house of the Coquistadores, with a glimpse of tall-grown garden beyond, and further Aztec Cypresses rising to a dark heights. And dead silence, like the black, porous, absorptive lava rock. (PS 32)

「アステカのイトスギ」という表現が、大昔の名残を感じさせ、ドン・ラモンとドン・シブリアーノが大昔のケツアルコアトル宗教を復活させることの伏線になっていると思われる。

ケイトは、当初はメキシコの地に反発を感じてやまない。「この場所の精神は残酷であり、下へ引きずり込むようで破壊的である」(The spirit of place was cruel, down dragging, destructive.; PS 50) と感じる。しかしメキシコの残忍性は、同時に魅力をも彼女に感じさせ、メキシコ人の美しさをも呼び起こさせる。それは「彼の特異な美しさ、肉体の豊かさ、内部の重い血の力。また致命的で悪魔的な助かりようのなさ、深刻な不信。」(his peculiar beauty, a certain richness of physical being, a ponderous power of blood within him, and a helplessness, a profound unbelief that was fatal and demonish.: PS 52) である。彼女は常に相反する感情を、小説の最後までメキシコとメキシコ人に抱き続けるのであるが、しかしながら、少しずつメキシコに対する感動が勝っていつているように思われる。メキシコ人には何かやり場のない欲求不満があるが、それは地霊のせいかもしれないと思う。

Perhaps something came out of the earth, the dragon of the earth, some effluence, some vibration which militated against the very composition of the blood and nerves in human beings. Perhaps it came from the volcanoes. Or perhaps even from the silent, serpent-like dark resistance of those masses of ponderous natives whose blood was principally the old, heavy, resistant Indian blood. (PS 55)

この引用に見られるように、メキシコは大地の内部の影響を大きく受けていると思われ

る。これは白人たちの空を目指すキリスト教の精神性とは異なるものなのである。それゆえ、ドン・ラモンとドン・シプリアーノは、空と関連付けられる一方で、大地と暗黒の太陽を住処とするケツアルコアトル信仰を説いて、キリスト教では救われなかったメキシコ人たちの魂を救おうとするのである。ケイトがドン・シプリアーノやドン・ラモンと関わることは、彼女がサユラ湖を渡っていくことから進展してゆく。前にも述べたようにサユラ湖からは、古のケツアルコアトルという神が出現したということが新聞に載り、彼女はこの記事に惹かれてサユラ湖を見たくなったのである。彼女の二人の友人の白人男性たちは、メキシコに対して興味を抱かず、直ぐに去っていくのであるが。しかしケイトは、メキシコとどんどん深く関わってゆくのである。彼女は、神について、キリスト教とは異なる神の到来が必要であると思いつく。

All a confusion of contradictory gleams of meaning, Quetzalcoatl. But why not? Her Irish spirit was weary to death of definite meanings, and a god of one fixed purport. Gods should be iridescent, like the rainbow in the storm.... ---Ye must be born again. Even the gods must be born again. We must be born again. (PS 58-9)

以上の引用に見られるケツアルコアトルの本質「矛盾性」こそが、ロレンスが人間の活力を取り戻すために必要であると考えているものなのである。ゆえにドン・ラモンは、「彼の目から発せられるこんなにも強烈な無意識」(Such intense unconsciousness from his eyes; PS 67)と「半野生の強烈さと粗野さ」(the intensity and the crudity of the semi-savage.; PS 67)を備えているのである。彼の部下であるドン・シプリアーノもそうである。これらの特質は、文明の機械性、論理性と対立するものである。そしてメキシコは「精神が舞い上がるのを妨げ」(To prevent the spirit from soaring; PS 72)、人間を下へ下へ引きずりこんでゆく蛇なのである (Mexico was a snake; PS 72)。ドン・ラモンは、「メキシコはもう一つのアイランドです。……ああ、人間は決して自分自身の支配者になれません。私がもし仕えるとするれば一つの観念に仕えたくありません。それは古いワイン袋のようにひび割れ漏れます。私は私に男性性を与えてくれる神に仕えたい。自身の男性性を離れて男には何の自由もありません。」(Mexico is another Ireland. --- Ah, no, no man can be his own master. If I must serve, I will not serve an idea, which cracks and leaks like an old wine-skin. I will serve the God that gives me my manhood. There is no liberty for a man, apart from the God of his manhood.; PS 73)とケイトに言う。これが観念的になった西洋の神との違いであろう。ケツアルコアトルは、空ではなくて大地の中心に生き、光り輝く太陽ではなくて暗黒の太陽を目指す神である。そして人間の肉体の中心と呼

応する神である。ケイトは、ドン・ラモンやドン・シプリアーノと付き合っているうちにメキシコの「希望のなさと頼りなさの不思議な感情」(a strange feeling of hopelessness and of dauntlessness; *PS* 76)と「共鳴の不思議な火」(a strange fire of compassion; *PS* 76)が胸の中に沸き起こるのである。「不思議」という言葉が度々使われており、ケイトがどんどんメキシコに惹かれていくことが分かるし、メキシコの再生と同時に彼女の再生をも暗示させる言葉である。

ケツアルコアトルが身を顕したというサユラ湖をボートに乗って渡ってゆく時、ケイトは水面が精液のようであると感じる。

He pulled rhythmically through the frail-rippling, sperm-like water, with a sense of peace. And for the first time Kate felt she had met the mystery of the natives, the strange and mysterious gentleness between a scylla and a charybdis of violence; the small, poised, perfect body of the bird that waves wings of thunder and wings of fire and night, in its flight.; (*PS* 93)

上の引用でも「不思議な」と「神秘的な」という言葉が表われている。神秘さは矛盾と関連する言葉であり、機械的な合理性とは反対の意味である。そして、ケイトは、「全ての機械的な、太陽の運行と反対に回る機械的な運動から自分自身を切り離すこと」(to cut herself off from all the mechanical widdershins contacts.; *PS* 104)にし、「太陽と同じ運行をする世界をそっと自分に引き寄せること、そして彼女にその動きを加えること。葉を伸ばす木のように、大きな太陽と星々を生命の動きとして自分に加えること」(But to let the sunwise world steal across to her, and add its motion to her, the motion of the stress of life, with the big sun and stars, like a tree holding out its leaves.; *PS* 104)を願い「私に神秘を与えて欲しい。そして私のために世界を再びよみがえらせて欲しい！そして人間の機械的な動きから私を解放して欲しい」(Give me the mystery and let the world live again for me! And deliver me from man's automatism.; *PS* 105)と思うようになる。このような宇宙と呼応した生き方こそ、ロレンスが『チャタレー卿夫人の恋人』について」においても述べている内容である (*LCL* 324)。彼女は、ケツアルコアトル信仰の特徴である論理を超えたものの存在に気がつくようになった。

She was surprised at herself, suddenly using this language. But her weariness and her sense of devastation had been so complete, that the Other Breath in the air, and the bluish dark power in the earth had become, almost suddenly, more real to her than so-called reality Behind the fierce sun the dark eyes of a deeper sun were watching, and between the bluish ribs of the mountains a

powerful heart was secretly beating, the heart of the earth,; (PS 108-9)

上の引用の「大地の心臓」という言葉は、「世界の心臓」と呼応しており、大地の中心を目指す蛇であるケツアルコアトル信仰に繋がる。かくして、ケイトがドン・シプリアーノの宗教上の妻となる伏線を形成している。

しかし、ケイトは請われて宗教上の妻となったが、本物の妻というわけではない。最終章の「この地で」において、小説の最後までケイトはアイルランドに帰るべきかメキシコにドン・シプリアーノの本当の妻となって留まるべきか悩み続ける。しかし、彼女はドン・シプリアーノによって新しい性愛を目覚めさせられたことによって、最終的にはメキシコに留まることが暗示されている。かくして、新しい女性として再生するというロレンスの主題が、この小説ではかなり強く描かれていると思われる。

V 黒い神ケツアルコアトル

ケツアルコアトルの特徴は、ラモンが書き読み上げたケツアルコアトル賛歌からその特徴が分かるが、更にケイトがドン・ラモンやドン・シプリアーノと関わってゆき、彼らの信仰に共鳴してゆく過程で理解されるものである。

次にケツアルコアトルの特徴を見てみよう。

He felt his spirits sinking again, his limbs going like lead. There is only one thing that a man really wants to do, all his life: and that is, to find his way to his God, his Morning Star, and be alone there. Then afterwards, in the Morning Star, salute his fellow men, and enjoy the woman who has come the long way with him. (PS 253)

この引用に見られるが、「明けの明星」は夜と朝のちょうど変わり目の星であり、それは夜と昼の均衡を保つものの象徴である。ケツアルコアトルは「明けの明星」或いは「宵の明星」と呼ばれている。つまり「矛盾した」性質のケツアルコアトルは、夜と昼という両者を均衡状態に保っている存在なのである。それは理論より先に存在する神であり、「見よ！我は常にここに存在する！」(Lo! I am always here!; PS 177)という言葉で表現される。明日も昨日も持たず、今日さえも持たないただ「存在」するだけの神である。「深い眠りにある人間が明日もきのうも今日も持っていないように、そしてただ存在するだけのよう、永遠の宇宙の静穏な広大な蛇は今にのみ、そして永遠に今にのみ存在するのである。」(As a man in a deep sleep has no tomorrow, no yesterday nor today, but only is, so is the

limpid, far-reaching Snake of the eternal Cosmos, Now, and forever Now.; PS 176) そしてキリストに対立するものとして「黒い顔」(the dark face; PS 222)をもち、キリストの「白い顔」(his face was white; PS 222)とは反対の色で表されている。そしてドン・ラモンやドン・シプリアーノも肌色と髪の色を強調されているが、黒い彼らは非常に美しいという印象をケイトに与えている。

またケツアルコアトルは、「世界の核にいる炎の蛇」(Snake of the fire of the heart of the world; PS 196), 「輝かしい金色と生きている闇にいる蛇」(a snake of brilliant gold and living blackness; PS 196) と呼ばれる。火は大地の中で燃えているので、ケツアルコアトルは大地の中心に存在すると言われる。また、「輝かしい金色」は見えない太陽を指しており、空に存在する見える太陽と対をなしている。そして人間もその肉体は「魂の炎」(the flame of the soul; PS 300) と考えられ、「炎」は真の生命の象徴と捉えられている。

Only at the very centre of her sometimes a little flame rose, and she knew that what she wanted was for her soul to live. The life of days and facts and happenings was dead to her, and she was like a corpse. But away inside her a little light was burning, the light of her innermost soul. Sometimes it sank and seemed extinct. Then it was there again. (PS 307)

ケイトは、メキシコへ来てドン・ラモンやドン・シプリアーノに出会って影響を受けるまでは、自分の生命の炎が消えてしまったと感じていたのだが、上の引用に見られるように、二人の男性によって救われたのである。また、「最深奥の魂の火」は、ケツアルコアトルが「内奥の火の竜」と言う言い方をされるのと響き合っている。つまり、ケツアルコアトルは、人間の内心に存在する神であり、この信仰は、人間の内面と宇宙が呼応することを目指している。ラモンが「どんなに深い溶岩を秘めているか分からない黒い火山」(underneath a black volcano with hell knows what depths of lava; PS 309) と表現されるのも同様である。また、ドン・シプリアーノも「彼女が見ることが出来たのはただ彼が噴き出す力という黒い煙、彼女に呪文を投げかける彼の血の重く黒い震え」(All most she could see the black fume of power which he emitted, the dark heavy vibration of his blood, which cast a spell over her; PS 310) と書かれ、火山を連想させる。そして彼の顔は、前にも述べたように「神であると同時に悪魔の顔、不死のパン神の顔」としてパン神と関連付けられているが、彼の名前「シプリアーノ」はイトスギと関連付けられているほか、ヴィーナスの島キプロス島と関連付けられ、キリスト教以前の時代と関連付けられている。また、ヴィーナスは「宵の明星」かつ「明けの明星」の異名であり、かつ「性愛の女神」である。ゆえに彼が信仰するケツアルコアトルは「性愛」と関連付けられる。シプリアー

ノはケイトに「古の、たそがれのパン神の力を彼女に投げかけた」(casting the old, twilit Pan-power over her; PS 311)と書かれ、それはまた「古代の男根的神秘」(the ancient phallic mystery; PS 311)と表されている。つまり、『羽鱗の蛇』の主題は『チャタレー卿夫人の恋人』の主題に繋がるものと言えるであろう。

そしてケイトはドン・シプリアーノと結婚して彼に抱かれた時、その性愛がジョアキムとの性愛とは全く異なった喜びをもたらすことに気がついて、これこそ自分が求めていた男女の交わりであると悟るのである。彼は、「私の悪魔の愛人」(My demon lover; PS 312)、或いは「至高の神魔の顔。弓形の眉と微かに下がった目と、ヤギ髭の緩やかで軽い房を持っている。神。永遠のパン神。」(the face of the supreme God-demon; with the arching brows and slightly slanting eyes, and the loose, light tuft of a goat-beard. The Master. The everlasting Pan.; PS 312)となるのである。矛盾した言葉である「神」と「悪魔」が一人の存在のなかに同居していることはケツアルコアトルの特徴を備えているものであり、ドン・シプリアーノがケツアルコアトルの代理人であることを表している。ケイトは、ドン・シプリアーノからパン神の神秘を感じたとき、ケツアルコアトルによる彼との結婚を受け入れる。次の引用は、ケイトとドン・シプリアーノの性愛を表している。

She trembled, and her limbs seemed to fuse like metal melting down. She fused into a molten unconsciousness, her will, her very self gone, leaving her lying in molten life, like a lake of still fire, unconscious of everything save the eternity of the fire in which she was gone. Gone as the burning bush was gone. Gone in the fadeless fire, which has no death. Only the fire can leave us, and we can die.

And Cipriano the master of fire. The living Huitzlopochtli, he had called himself. The living fire master: the salamander. (PS 320)

この引用からは、ケイトが体験した性愛の深さと高さが感じられる。そしてケツアルコアトル信仰の意味は、この性愛を体験することにあるのである。ケイトは、「自己の処女性を再発見することによって以外にいかにして人は再び人生を始めることが出来ようか？」(How else, she said to herself, is one to begin again, save by re-finding one's virginity? PS 394)と思うが、ドン・シプリアーノと交わったとき、自分が処女に戻ったと感じたのである。

ケツアルコアトルの象徴となる色は、空の鳥の「青」と水の「白」及びそれと対をなす大地の「黒」と火の「赤」であるが、「黒」はまた蛇をも表している。そして「赤」は血の色でもある。大地に根ざし空を目指すものが木でありケイトはマリンチと呼ばれる木の神となって「緑」の衣裳をまとうことになる。このように、ケツアルコアトル信仰は、大自

然界と深く関わっており、また人間はケツアルコアトルを内面に抱くとき小宇宙となるのである。

結論

ロレンスは、『羽鱗の蛇』を書くまでに、最初の長編小説である『白孔雀』からすでに黒い神を書いてきている。それは、『白孔雀』ではパン神と関連付けられているアナブルという森番であった。ケツアルコアトルもパン神と関連付けられている。また『不倫』ではシーグモンドが「偉大なる心臓」を持っていると暗示され、「偉大なる心臓」という言葉は『羽鱗の蛇』でも「全世界の心臓のように目に見えないで脈打っている神」(the God that beats invisible, like the heart of all the world, PS 433) という言葉に重ね合わせられている。更に『息子と恋人』では、白いキリスト教の世界を代表するポールの母親は死んで、黒い神の原型である父親が生き延び、ポールは小説の最後では闇の世界を体験する。更に既成の価値観を破ろうとするアナが『虹』に登場し、『恋する女たち』でも、バーキンは宇宙には黒い崩壊の河と銀色の生成の河があるという二元論をアーシュラに説く。そしてバーキンは「彼女の悪魔の恋人」(WL 43) という言葉を口にし、彼自身も「恐ろしい悪魔主義者」(WL 43) とハーマイオニー (Hermionie) に言われている。バーキンは、この「悪魔の恋人」を闇と関連付けている。「悪魔の恋人」という表現は、『羽鱗の蛇』にも登場する。それはドン・ラモンとドン・シプリアーノを指している。次に、『アルヴァイナの墮落』においては、アルヴァイナは異教を信奉するジプシー芸人一団の一人であるチッチョと結婚して淑女の道から脱する。また、この小説には「黒い神」(a Dark Master: LG 48) と呼びかける作者の言葉がある。また『アローンの杖』では、アローンはキリスト教の思想を捨てた新たな生き方をリリーによって導かれる。更に『カンガルー』では、黒い神の思想がサマーズによって説かれ、キリスト教を信奉するカンガルーとの舌戦が戦わされ、サマーズはカンガルーを振り切る。詩集『ごらん 僕たち勝ったんだよ』(Look! We Have Come Through!) においても黒い神はアイルランドのドルーイドの神として言及されている。このように『羽鱗の蛇』を書く以前から、ロレンスは様々な作品中で黒い神を描いてきた。そして『羽鱗の蛇』において、黒い神はその特徴が最も詳しく強く激しく描かれているのである。

「炎の蛇」として言及されている「炎」は生命のエネルギーのことであり、「蛇」はキリスト教に対立する概念である。ケツアルコアトルの「我は、二道を目指す」という言葉からわかるように、これは精神と肉体の両要素を信奉し、更に両者の均衡をめざすものである。ゆえに男と女はどちらも欠けてはならない存在なのである。ケイトが真の性愛をドン・

シプリアーノによって悟ったように、意志や神経で味わう性愛ではなくて、無意識の官能の歓びを目指すものである。

ドン・ラモンが、個を超えた宇宙の意志を重視しているように、この宗教は万物の「存在」そのものを論理とは関係なく肯定するものである。ドン・ラモンは自分が意志を持つことを怖れている。ゆえに、この宗教はナチスの他者支配とは全く正反対の思想と言えよう。

以上に論じてきたように、ロレンスの「黒い神」はケツアルコアトル信仰に集大成されていると言えるであろう。

注

- 1) *Mornings in Mexico* (Lawrence, David Herbert. *Mornings in Mexico and Etruscan Places*. Penguin Books Ltd, 1927–1973) の中の ‘Indians and Entertainment’ や ‘The Hopi Snake Dance’ の章を参照のこと。
- 2) 13世紀末から14世紀前半にメキシコで繁栄したインディオの部族であるアステカ族によって築かれた文明である。1521年にスペイン人コルテスの軍が滅ぼした(『広辞苑』 第4版。岩波書店に依る)。
- 3) ペルシア神話に登場するミトラ神崇拜では、雄牛が生け贄として使用されたが、学者の中には、今日の闘牛はその頃の宗教的儀式のなごりではないのか、と考えている人がいる(PS, 448.)
- 4) Harry T. Moore, “The Plumed Serpent,” (Mark Spilka ed., *D.H. Lawrence*) p.66. 参照。ここでムーアは、ロレンスはファシストではなかった、と述べている。
- 5) アステカ神殿には、このような名前の女神は存在しないので、ロレンスの新造名であると思われる。なお、コルテスが生きていた時代にはマリナという名前のインディアン女性がいて、コルテスとインディアンの仲介の働きをしていたと言われている。彼女の名前マリナに尊敬を表す意味の接尾辞「リンチ」がつけられて、「マリンチ」いう名称が出来たと考えられている(PS, 475.)。
- 6) ロレンスは「朝」を尊重しているが、これは、朝が「汚れていない」時間の始まりであると考えているためと思われる。

引用文献

- Lawrence, David Herbert. *Complete Poems*. Penguin Books, 1993. (略号CP)
———. *Kangaroo*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994 (略号K)
———. *Lady Chatterley’s Lover & A Propos of Lady Chatterley’s Lover*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993. (略号LCL)
———. *The Lost Girl*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981. (略号LG)
———. *Phoenix*. E.D. McDonald. London: Heinemann, 1939; 1967. (略号Ph)
———. *The Plumed Serpent*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987. (略号PS)

———. *The Trespasser*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981. (略号T)

———. *Twilight in Italy*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994. (略号TI)

———. *Women in Love*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987. (略号WL)

David Ellis and Ornella De Zordo (ed.), *D.H. Lawrence : Critical Assessments Vol. III* (East Sussex: Helm Information, 1992) (略号CA)

Mark Spilka (ed.), *D.H. Lawrence*. U.S.A.: Prentice-Hall, Inc.: 1963.

The Holy Bible: New International Version. Hodder and Stoughton: London Sydney Auckland
Tronto: 1984.